

認知症の周辺症状－その② 徘徊

日野病院 病院長 孝田 雅彦

日野病院の孝田雅彦病院長が、さまざまな病気や健康について、その予防法や健康に過ごすための豆知識などお役立ち情報をお届けします。



認知症による徘徊 記憶障害と見当識障害

「〇〇さんの行方が分かりません」このような地域の放送を聞いたことはないでしょうか。

徘徊は認知症の患者さんでよく見られます。徘徊と言っても、何の目的もなくうろろろしているわけではなく、家を出るときは職場に行こうと思ったり、家族の元へ行こうと思ったりしているようです。途中で目的地を忘れてしまったり、自分がどこにいるのか分からなくなってしまうったり、あるいは、自分が何をしようとしているのかも忘れてしまいます。医学的に述べると、徘徊

は記憶障害と見当識障害によって起こります。記憶障害は前回述べましたので、今回は見当識障害について述べます。

見当識とは時間と場所、空間の中に自分を位置づける能力です。見当識が障害されると時間が分からなくなり、季節・日付も分からなくなり、現在と過去の区別がつかなくなり、若いころの自分を今の自分と違い、鏡に映った年老いた自分が分からず、他人と違って話しかけたりします。場所の見当識障害が起こると毎日歩いている道が分からなくなり、近所で迷子になったり、家の中でトイレが分からなくなってお漏らしをすることもあります。

次に、自分の年齢や周囲の人との関係性が分からなくなったり、家族が分からなくなったり、家族を見て「どんな様ですか？」と聞くようなことになります。毎日お世話をしている家族が分からなくなると、家族にとってとはとてもショックなことです。見当識障害は時間・場所・人の順にあらわれます。

徘徊を予防するために 大切なことは

さて、徘徊に話を戻しましょう。徘徊が起こると、交通事故にあつたり、けがをしたり、場合によっては死亡する場合があります。介護者は患者を心配して近所を探し回ったり、警察に連絡したりと、身体的にも精神的にもヘトヘトになってしまいます。高齢化社会における大きな社会問題です。

では、どのようにして予防すれば良いでしょうか。確実な対策はありませんが、いくつか試みるべきことがあります。

まず、患者のストレスを

減らすことです。自宅に居場所がないとか、恐怖を感じることがないようにしてください。次に、趣味や仕事など役割を与えることです。畑仕事や編み物、集中できるものであればなんでも良いと思います。体調や生活のリズムを整え、気持ちを落ち着かせるのも大切です。腰痛や頻尿、不眠があれば徘徊のリスクは増加します。持病があれば治療しましょう。

徘徊は家族だけで対処しようと思わず、地域のコミュニティの利用などで介護者の負担を減らすことが、患者にとってもいい影響を与えます。

